

	誰に対する質問か	内容	回答
1	川瀬 (関大)	<p>教学IRによる学生アンケートの丁寧な分析は大変参考になりました。</p> <p>その後の授業運営に係る具体の改善を促すため、今回の詳細な分析結果を用い、各学部へ何らかのアプローチ（文書発信以外）を行われていますか。</p> <p>2021年度以降も含め、アフターコロナを見据えた業運営(DX推進)の方針策定など検討されていますか。(講義系は主にオンライン⇔実験、実習、実技系は対面 等)</p>	<p>個別学部への働きかけではなく、全学的なアプローチを行っています。大学執行部におけるデータ共有と、話題提供でご紹介した文書による働きかけを行っています。文書には、依頼だけではなくデータの公開を含めて記載しました。また、新任教員(非常勤を含む)へのFDと授業設計や学習評価に関する全学的なFDも展開しています。学部からは必要に応じてFDや支援・連携・相談を水平的に展開する予定です。</p> <p>2021年度以降の授業運営方針は、現在議論を進めているところです。関西大学のDX推進方針はこちら(https://www.kansai-u.ac.jp/ja/assets/pdf/about/approach/ku_dx.pdf)をご確認いただけますと幸いです。この方針に加え、学部・研究科の方針、カリキュラム等に基づき、遠隔授業を活用した授業運営方針を策定する予定をしています。</p>
2	川瀬 (関大)	<p>対面授業は、履修生全員が出席する通常の対面授業と同じでしょうか。あるいはグループごとに出席させるなど人数制限をしているのでしょうか。よろしくお聞かせいただけます。</p>	<p>関西大学では、グループやクラスごとの出席という分散型ではなく、一定の距離を確保して着席できる環境を保持し、対面授業を行いました。中には基礎疾患等の理由で学期を通して対面授業への出席が困難な学生には、学部・研究科の判断により、対面授業を遠隔授業として受講することを認めて秋学期は運用を行いました。</p>
3	井芹 (法政)	<p>オンライン授業において、課題、レポート等のフィードバックに対して特に学生から評判がよかった点があればご教示ください。よろしくお聞かせいただけます。</p>	<p>様々なポジティブ評価意見の中から「特に」と括弧で回答するのは難しいと前置きしたうえで、学生から寄せられた、代表的なフィードバックに関する肯定的意見を紹介します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「リアクションペーパーを毎回書いて、その中で皆が共通で分りにくかったことを次の授業で解説していたのが良かった」 ・「提出課題に対し個別のコメントや添削があり、やる気が続いた」 ・「先生からのコメントは勉強になったと同時に、提出してコメントが返ってくるのが楽しかったです」 <p>以上です。遠隔授業下におけるフィードバックが、学習意欲の維持、学びの楽しさに繋がったという学生の声が見られました。</p>
4	千田 (明治)	<p>授業アンケート収集方法について</p> <p>成績開示時に授業アンケート回答を必須にすることでアンケート回答率を大幅に向上したとお話いただきました。大変効果的な方法であると存じます。</p> <p>一方で、成績開示時のアンケートは授業終了から一定期間が経過した時点になってしまおうと存じます。このような場合、授業の満足した点、改善して欲しい点を学生が忘れてしまう。また、成績を早く閲覧したいがために、学生がよく考えず回答してしまうという懸念があるかと存じます。このような点についてのお考えをお聞かせいただけますでしょうか。</p>	<p>成績開示時にアンケート回答を必須とする機能は、本学の教育課程や教育内容、授業方法の適切性等を学生の学習実態から検証するために年に1度実施している「大学における学びに関するアンケート」で活用しており、「授業改善アンケート」については春学期・秋学期の授業期間中に各1回実施しています。</p>
5	井芹 (法政)	<p>テキストの出現度による分析は非常に興味深いお話でした。よりニーズに応じた対応策を講じやすいのではと思いますが、これら集計の結果を踏まえ、大学側の責任ある説明と対応という観点で、向後、具体的に、学生の声を受けて、どのような部分で改善に向けて動いている、などのアフターケア(学生と共にニューノーマルを模索する)も行うご予定などはございますか。</p>	<p>過去のことですので「予定」ではありませんが、分析後の学生・教員・職員を対象とした動向については、公開スライドのp.24-27にて説明したとおりです。これらに加え、分析結果を起点として、あるいはその結果だけで決めているわけではありませんが、2021年1月に「より質の高いオンライン授業づくりに向けた交流・相談会 第6回特別企画: オンライン授業の Good Practice に学ぶ」を開催しています。こちらは、事例報告で述べた「オンライン授業に関する学生対象アンケート」の回答をもとに、学生が工夫を感じた授業として高い評価を得た先生方をお招きし、その授業方法を紹介いただく機会でした。</p> <p>また、質問文にある「大学側の責任ある説明と対応という観点で」、「学生の声を受けて」の改善に向けた動きについては、紙幅の都合からすべてをここで説明することはできませんが、たとえば次の取り組みがありました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「総長から皆さんへ 夏休み特別企画」 2020年4月より、「総長から皆さんへ」という情報発信を続けておりました。その第15信(7月31日)では学生からの言葉(感想・提案等)を募り、第16信(9月18日)にて言葉の紹介・御礼をしています。詳細はWEB掲載情報をご参照ください。 【ご参考】 第15信: https://www.hosei.ac.jp/pickup/article-20200730161445/ 第16信: https://www.hosei.ac.jp/info/article-20200916142632/ ・「With コロナ時代の教育活動を考えるワーキング」 With コロナを前提とした教育活動のあり方、展望、可能性について全学的な検討をすることを目的とし、2020年9月に設置されました。本会議には大学評価室長も参加し、オンライン授業のあり方、内部質保証のあり方等について全学的な検討を進めています。 ・「オンライン学生座談会」 2020年9月と10月に、教育開発支援機構長が中心となり、学生との座談会を開催しました。WEB上に実施報告を掲載しております。詳細はそちらをご参照ください。 【ご参考】 オンライン学生座談会の開催報告: https://www.hosei.ac.jp/info/article-20201029100506/?auth=9abb6458a78210eb17414bdd385bc154 <p>以上です。</p>
6	千田 (明治)	<p>今年度に蓄積された膨大な遠隔授業動画について、今後何らかの活用などをお考えでしょうか。</p>	<p>2020年度に作成したオンデマンド授業コンテンツの中には、今後恒常的に活用していくことのできる非常に優れたコンテンツが多くあることも事実ですが、総じて非常事態の中で緊急的に対応したものであるため、大学全体としては、2020年度に培ったオンライン授業運営・教材作成のノウハウを2021年度以降に活かすという着実なステップが必要であるとと考えています。</p> <p>このことを踏まえ、現在、学長の下に設置しているオンライン授業推進プロジェクトチームにて、対面授業とオンライン授業の要素を効果的に組み合わせるためのガイドラインの作成を進めています。必要な学内規定やガイドラインを整備したうえで、質保証の観点も重視しながら、各授業科目レベル及び各教育課程レベルにおける対面とオンラインのベストミックスを目指していきたいと考えています。</p> <p>なお、2021年度には、オンデマンド授業のコンテンツを利用して、付属高等学校生徒に向けた大学授業の参観学習(公開授業)の機会提供につながることを計画しています。</p>
7	千田 (明治)	<p>ポストコロナでは、私も対面とオンラインの組合せが必要と思います。対面とオンラインの短所を補完し合うような授業が教育をよくする一つの手段ですが、現時点で何かイメージする授業形態があればご教示ください。またそのような方針をどのように浸透させていくかも考慮することが必要と思いますが、そのような手順等について何かございましたらご教示ください。</p>	<p>オンライン授業に関する学生アンケート結果も踏まえ、オンデマンド型授業のコンテンツを利用した反転授業の推進を1つの事例としてあげたいと思います。これは、1つは効果的な予習復習の実施によって学習効果を高めるというアクティブラーニングの文脈から、もう1つは対面授業とオンデマンド型授業を1週に1回ずつ(計2時間)実施することで科目のクォーター化を図るという観点から重要であると考えます。科目のクォーター化は、学生が1つ1つの科目の学習に集中しやすいというメリットの他、学生の留学やボランティア活動のための時間の創出(本学ではアクティバームと呼んでいます)にもつながると重要な点と捉えています。</p> <p>なお、上述のアクティブラーニングの推進やアクティバームの創出については、本学がこれまで推進してきた総合的教育改革でも掲げているテーマです。学長の下に設置しているオンライン授業推進プロジェクトチームと各学部の教務主任が集う教務部委員会(特に同委員会の下に設置している総合的教育改革関連施策検討WG)が連携し、具体的な施策に落とし込んでいくことが重要だと考えています。また、方針提示と併せて、あるいはそれ先立って、対面授業科目とメディア授業科目の区分や、対面授業とオンライン授業の要素を組み合わせた授業設計のルール・仕組み作りが必要であると捉えています。</p> <p>この他、海外協定校の授業を本学の通常の授業の中に取り込む、海外協定校の授業をオンラインで履修し単位を修得するなどによる海外留学への動機付け、留学準備段階での活用等でも積極的に利用していきたいと考えています。加えて、本学は4キャンパスで教育を展開していますが、オンライン授業の活用により学生のキャンパス間移動が不要となるため、総合大学の強みを活かし、授業の選択肢を増やす取り組みも検討しています。</p>
8	井芹 (法政)	<p>課外活動についてのIR調査について、具体的にどのようなものをお考えでしょうか。</p>	<p>事例報告にて「IR担当としては未検証」と述べたとおり、具体的内容は現時点及びこの場で回答し難いものがありますが、たとえば、大学公認のピアネットや部・サークルの参加状況、卒業生アンケートにおける正課外活動の取り組み熱心度をアクティビティ情報とし、それらと知識・能力の成長感等のアウトプット/アウトカム情報との関係を見るというアイデアが考えられます。</p> <p>また、大学公認のピアネット活動は、IR担当ではなく教育開発・学習支援センターがその効果検証を試みています。具体的には、ピアネット活動を通じて獲得が期待される12個の能力を「ピアネット・コンピテンシー」として定め、各種活動で学生がどのような力を身につけたか検証を進めています。こちらの詳細にご関心がある場合は、本学の「ピアネットガイド」、「大学評価室ニューズレター第33号」をご参照ください。</p> <p>【ご参考】</p> <p>2020年度ピアネットガイド: https://www.hoseiyoiku.jp/ff/images/manabipeer/peernetguide2020.pdf</p> <p>大学評価室ニューズレター第33号 (p.7-8): https://www.hosei.ac.jp/application/files/8815/8079/6157/newletter201912.pdf#page=7</p>